

不安発
“できた感” 経由
“できた” 行き

NTTデータ 数理システム
2014年度 学生研究奨励賞 提出論文

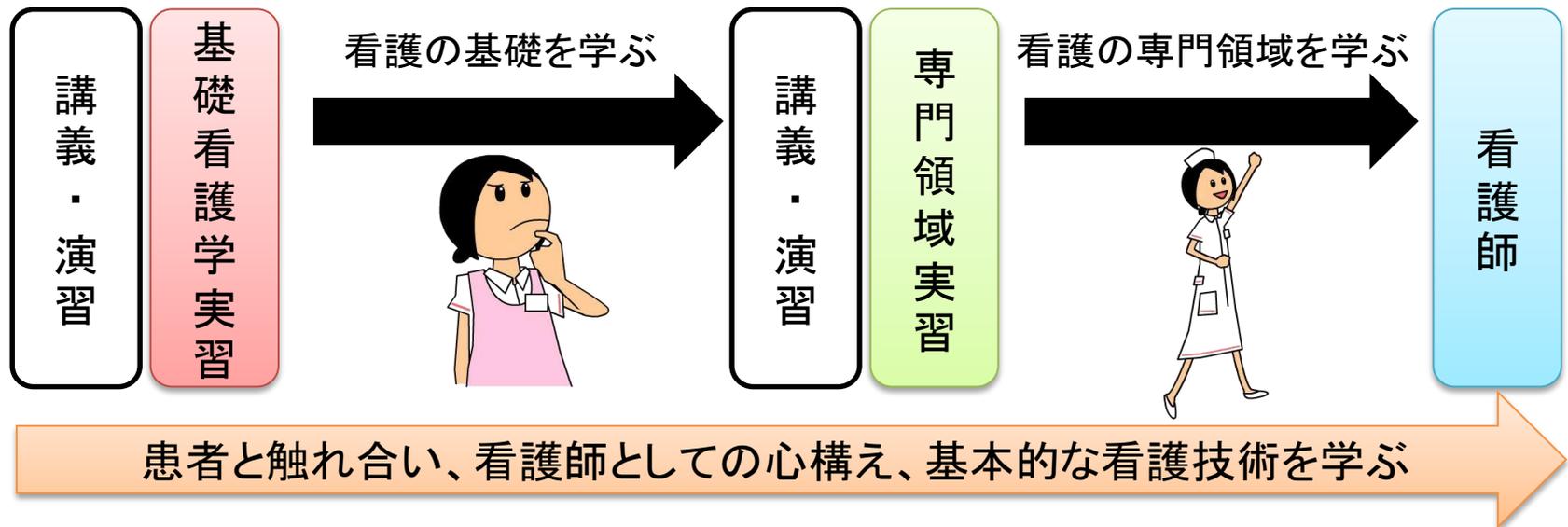
東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科
看護ケア技術開発学 樺島 稔

内容

1. 看護師になるには
2. 基礎看護学実習の位置づけ
3. “できた”と“できない”と“できた感”
4. 自己効力感(Self-Efficacy:SE)とは
5. 研究動機
6. 研究目的
7. 調査対象・調査方法、倫理的配慮
8. 結果
9. 考察
10. 不安から“できた”へのプロセス
11. 研究の限界とこれからの展望
12. 結論
13. 引用・参考文献

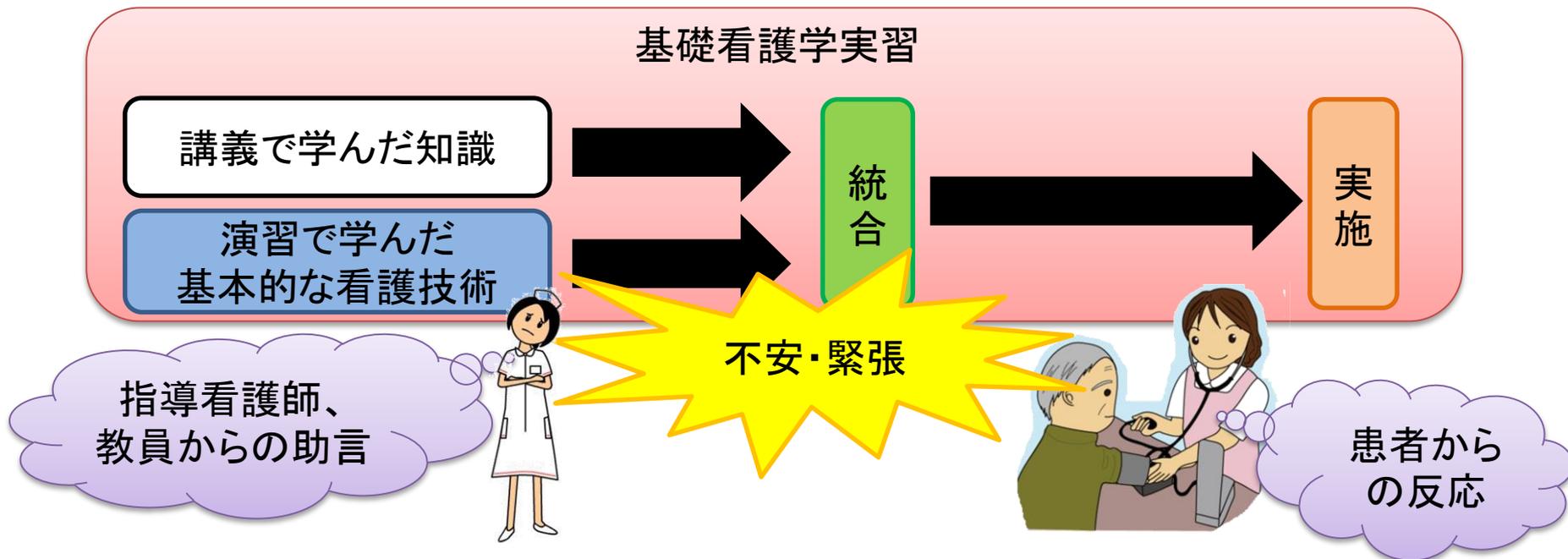
看護師になるには

- 看護学生が看護師になるためには、講義・演習から知識や技術を得るだけでなく、多くの実習を経験する。
- 看護学実習は、基礎看護学実習から始まり、成人看護学実習、小児看護学実習など各専門領域の実習がある。
- 学生は実習を通して、患者と触れ合い、また現場の看護師や教員から看護師としての心構えやコミュニケーション技術、看護の専門性を学ぶ。



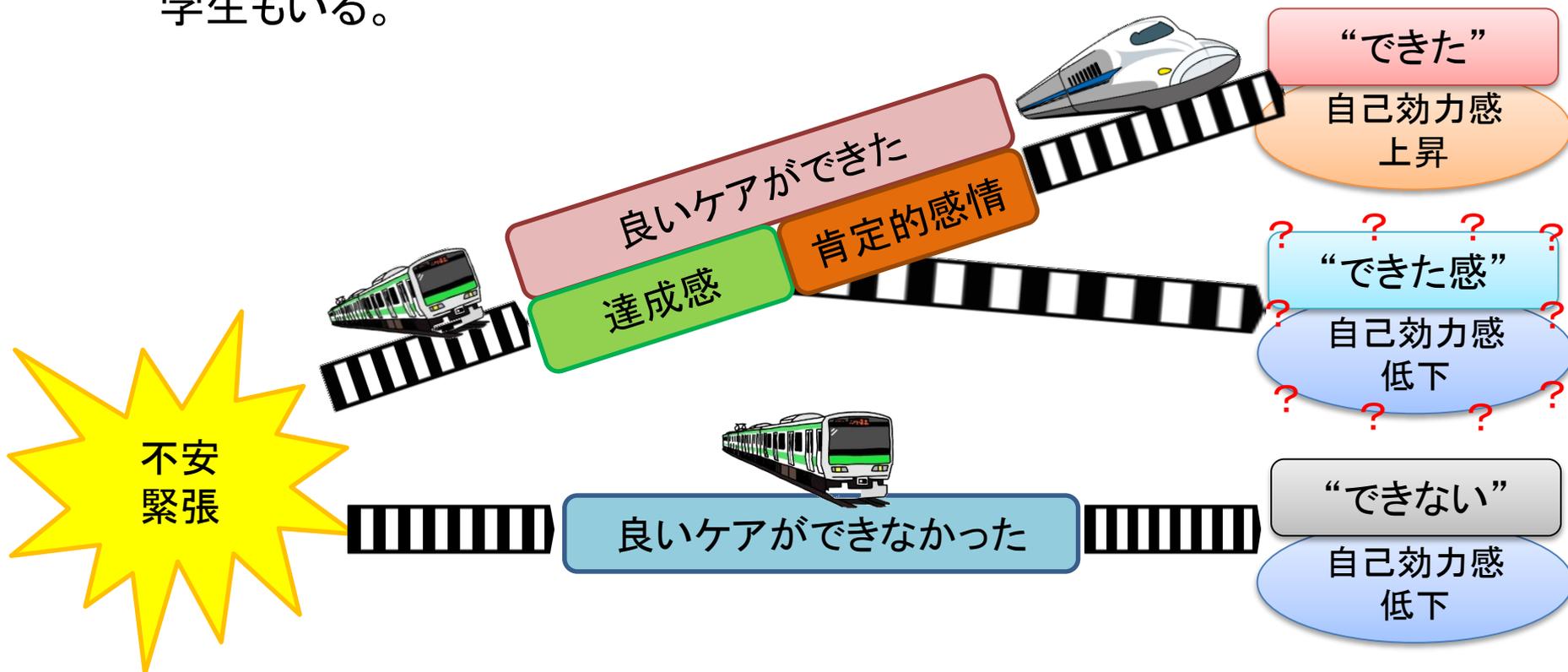
基礎看護学実習の位置づけ

- 基礎看護学実習に向けて学生は学内の演習で血圧測定や体位変換、移乗、清拭、足浴などの基本的な看護ケア技術を学ぶ。
- 実習目的の一つは、講義で得た知識と学内で演習した看護技術を統合し、ケアを提供することを通じて、“できた”という達成感を得て、学生としての自己効力感を高めることである。
- 学生はこのような実習を前にして不安や緊張を感じる。



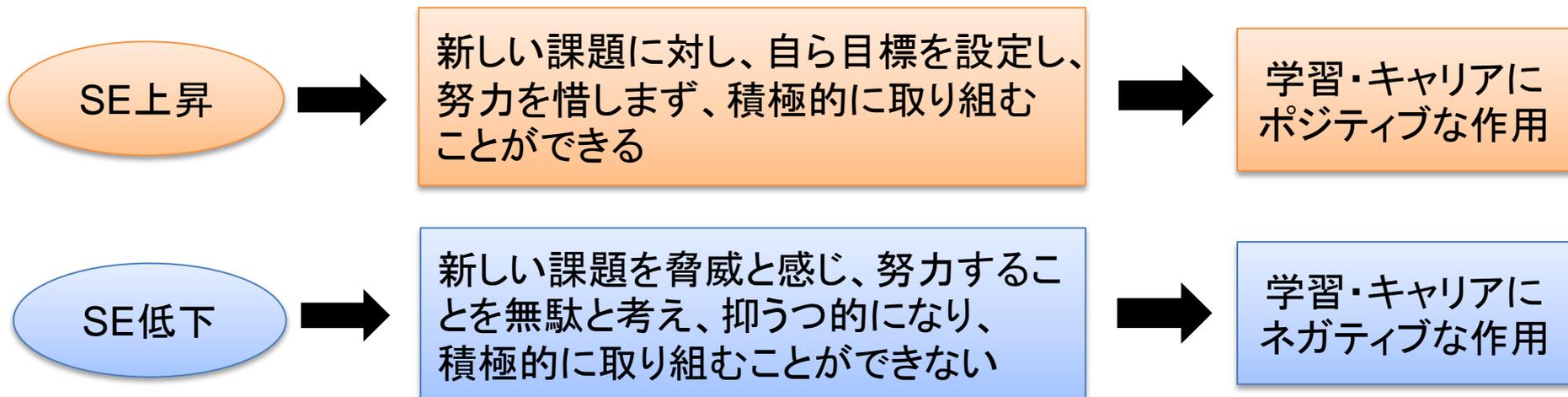
“できた”と“できない”と“できた感”

- 先行研究で遠藤、松永ら(1999)は、基礎看護技術演習時の自己効力感を高めるには、遂行行動の達成感を学生自身が認識し、また肯定的な感情を持つことが重要である¹⁾と述べている。
- しかし、実習時に感じる不安、緊張を乗り越え、学生自身が良いケアができたと実感できても、自己効力感の上昇に繋がらない“できた感”の学生もいる。



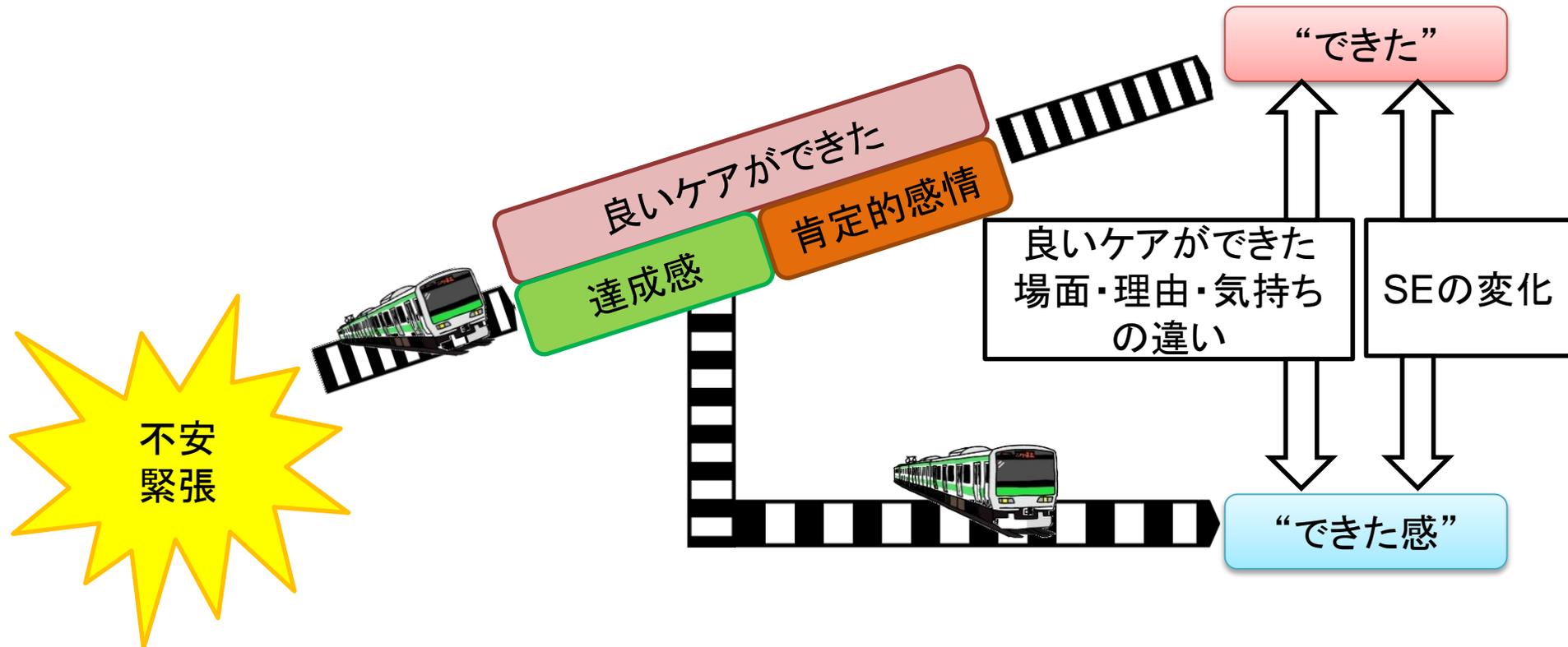
自己効力感(Self-Efficacy: SE)とは

- 自己効力感とは、積極的に課題に取り組むというような認識を意図的に働かせることであり、この自己効力感が行動の開発や学習への自信や意欲を促す²⁾。
Bandura. A (1985)
- ある状況を変化させる手段を遂行することに対する自己評価で、遂行できるという確信の程度³⁾。
江本(2000)
- 自己効力感が上昇すると、学生は新たな課題に対して自ら目標を設定し、努力を惜しまず、積極的に取り組むことができる。したがって、実習を通じて自己効力感が上昇することは、今後の学習や実習、看護師としてのキャリアにポジティブな作用を及ぼすと考えた。



研究動機

- 実習中に学生が良いケアができたと捉えていても、実習後にSE得点が低下することがある。
- 実習を通して“できた”学生と“できた感”の学生では、良いケアができた
と捉えた場面や理由、その時の学生の気持ちは異なるのか？
SE得点の変化が、“できた”と“できた感”に影響しているのか？



研究目的

基礎看護学実習において、良いケアができたと捉えた看護場面（以下、【場面】）、【理由】、その時の【気持ち】の記述と、SE得点の変化をもとに、学生が実習前に感じた不安から実習後のSEを上昇させる“できた”に至るプロセスを明らかにする。

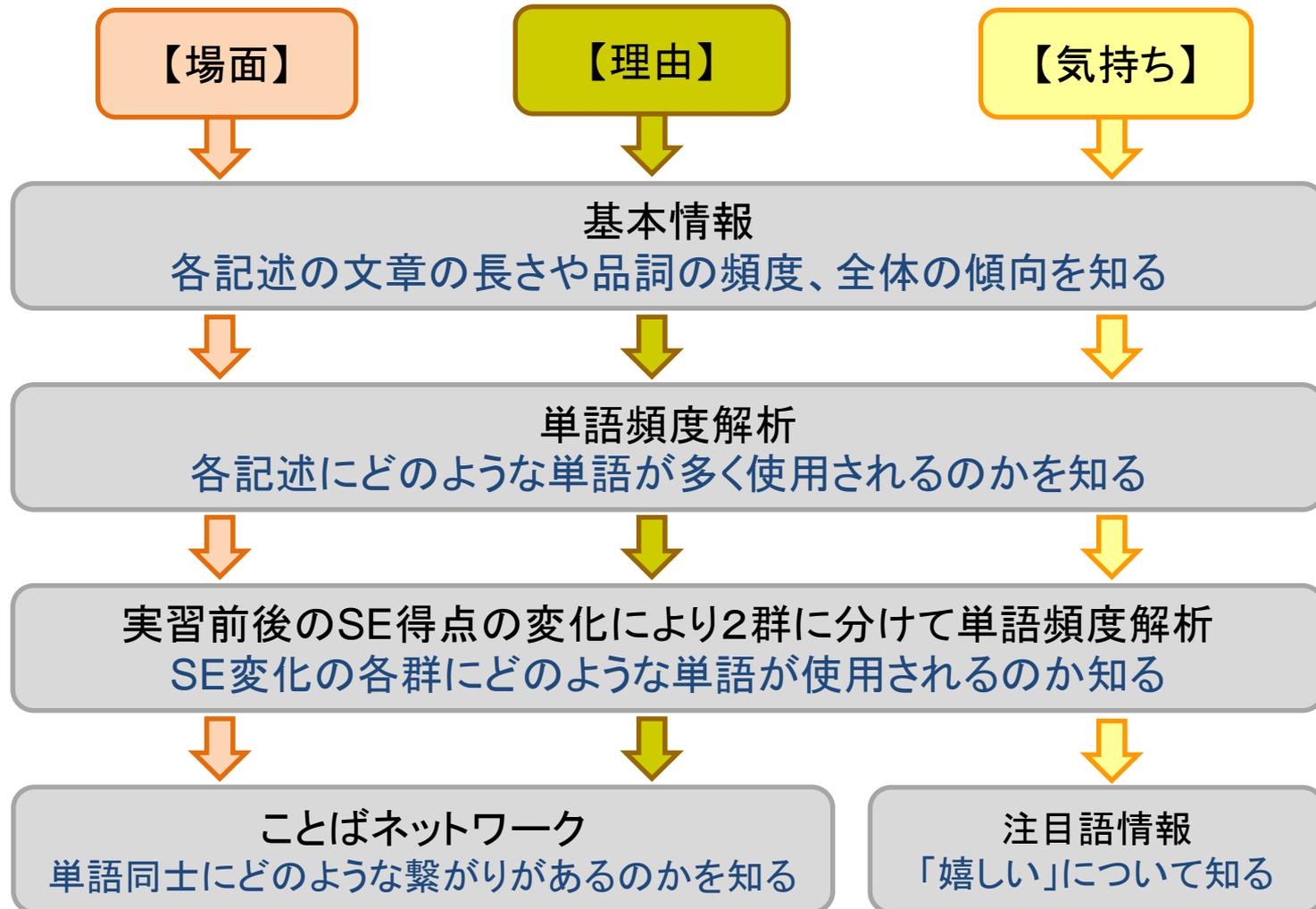
調査対象・調査方法

- 基礎看護学実習に参加した本大学看護学科2年生54名を対象とした。
- 実習後に、良いケアができたと捉えた【場面】【理由】【気持ち】の3点を自由記載のアンケートに記述してもらった。
- また、実習前後に学生全員に対し、一般性自己効力感テストを実施した。
- 一般性自己効力感テストは16問の質問から構成され、点数は0点から16点で、点数が高いほうが自己効力感が高い。

倫理的配慮

- 調査の実施前に、文書及び口頭にて研究目的や意義、研究方法を対象者に説明した。
- 研究への参加・不参加は自由であること、それに伴う不利益は一切生じないこと、個人情報取り扱いには十分注意することなどを説明し、アンケートの提出をもって本研究への参加の同意を示したものとした。

Text Mining Studio 5.0による分析



基本情報

表1 各記述の基本情報

	【場面】	【理由】	【気持ち】
総行数	54	54	54
平均行長(文字数)	40.3	41.5	31.6
総文数	58	67	64
平均文長(文字数)	37.5	33.5	26.6
延べ単語数	816	847	660
単語種別数	491	481	349

- 平均行長、総文数、平均文長、延べ単語数、単語種類別ともに【気持ち】の記述が最小であった。



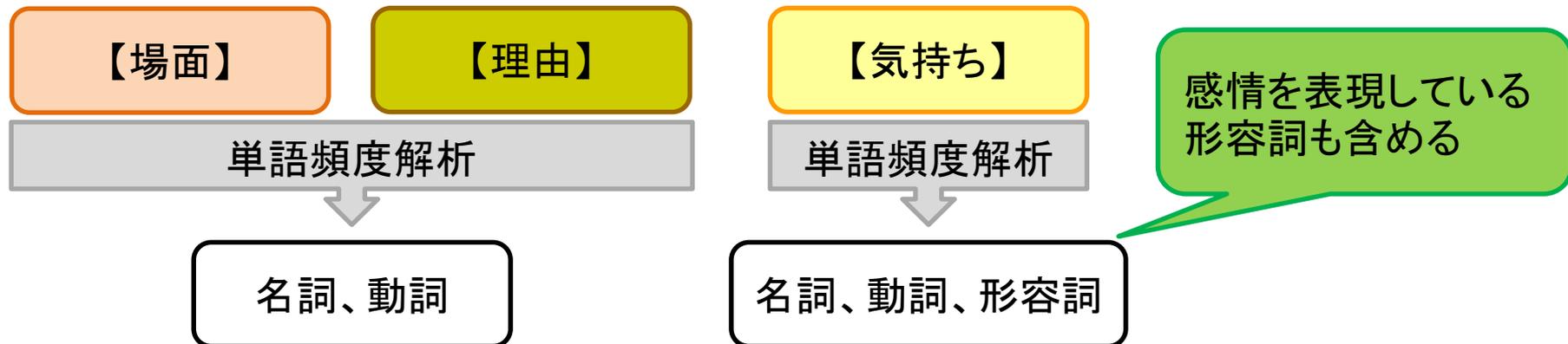
学生は【場面】【理由】と比較し、【気持ち】を表出しない

基本情報

表2 各記述の品詞と出現回数

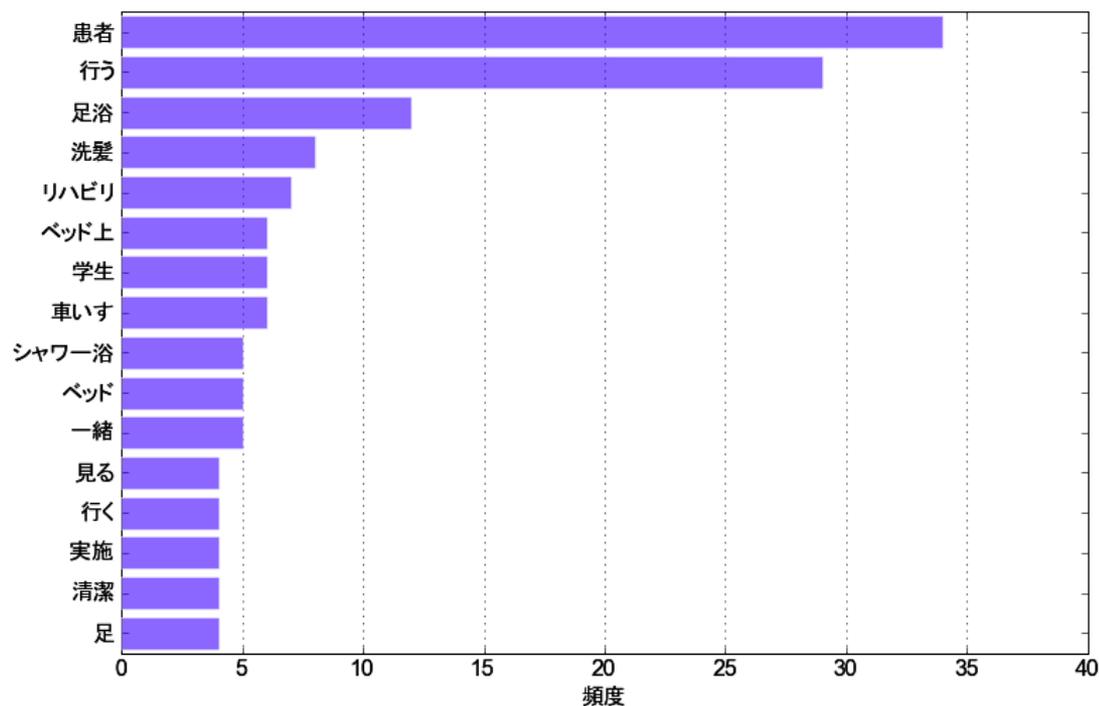
	【場面】		【理由】		【気持ち】	
1位	名詞	566	名詞	517	名詞	359
2位	動詞	184	動詞	180	動詞	144
3位	副詞	31	副詞	71	形容詞	75
4位	形容詞	19	形容詞	39	副詞	57
5位	接続詞	5	連体詞	15	接続詞	7

- 【場面】【理由】【気持ち】ともに名詞と動詞の出現回数が多かった。
- 【気持ち】は他の2記述と比較し、学生が感情を表出しているため形容詞の出現頻度が多かった。
- 以上の結果から各記述の単語頻度解析では以下の品詞を対象とする。



単語頻度解析:【場面】

【場面】	
患者	34
行う	29
足浴	12
洗髪	8
リハビリ	7
ベッド上	6
学生	6
車いす	6
シャワー浴	5
ベッド	5
一緒	5
見る	4
行く	4
実施	4
清潔	4
足	4



対象品詞: 名詞、動詞
述語属性: なし、否定
頻度: 4回以上

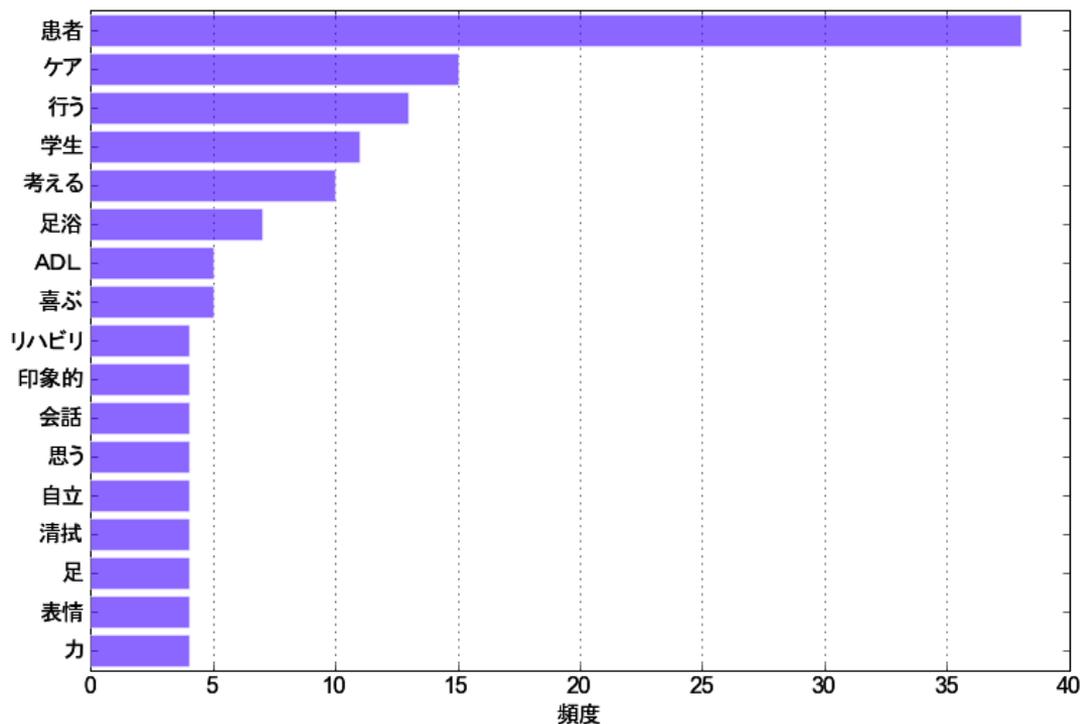
- ケアの対象である「患者」、動作である「行う」が多かった。
- 「足浴」「洗髪」「シャワー浴」などの清潔ケアが多かった。
- その他のケアでは「リハビリ」が挙げられた。
- 場所は「ベッド」や「ベッド上」が多かった。

単語頻度解析:【理由】

【理由】

患者	39
ケア	15
行う	13
学生	11
考える	10
足浴	7
ADL	5
喜ぶ	5
リハビリ	4
印象的	4
会話	4
思う	4
自立	4
清拭	4
足	4
表情	4
力	4

対象品詞: 名詞、動詞
述語属性: なし、否定
頻度: 4回以上



- 動作の主体である「学生」、対象である「患者」が多かった。
- 「喜ぶ」「気持ちよい」「表情」といった患者からの反応が多かった。
- 「ADL」「自立」という患者の自立を促す援助が行えたからという理由も多かった。

SE得点の変化

表4 自己効力感の実習前後の変化 (n=54)

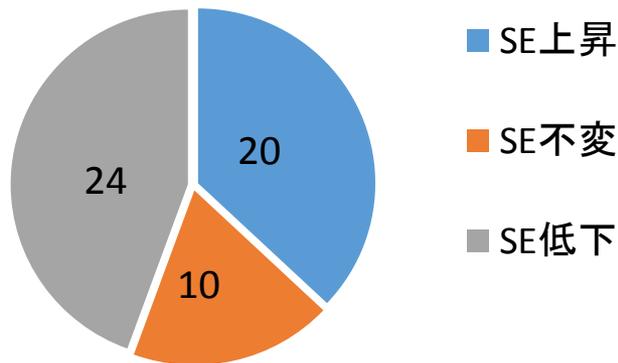
	自己効力感
実習前	7.81±3.37
実習後	7.20±3.21

- 実習後のSE得点の平均点は、実習前より低下した。
- 実習前後のSE得点の変化は、上昇20名、不変10名、低下24名であった。



実習前後で学生のSE得点は低下した

自己効力感の変化による人数
(n=54)



- 実習前後のSE得点の不変または上昇した群を《上昇》、低下した群を《低下》とした。



《上昇》と《低下》の2群に分けて、
良いケアができた【場面】【理由】【気持ち】
について単語頻度解析を行った

SE得点の変化と【場面】

表5 単語頻度解析:【場面】

《上昇》		《低下》	
患者	20	患者	14
行う	17	行う	12
リハビリ	6	足浴	6
足浴	6	学生	4
洗髪	5	車いす	4
ベッド上	4	シャワー浴	3
一緒	4	洗髪	3

品詞: 名詞、動詞
述語属性: なし、否定
頻度: 3回以上

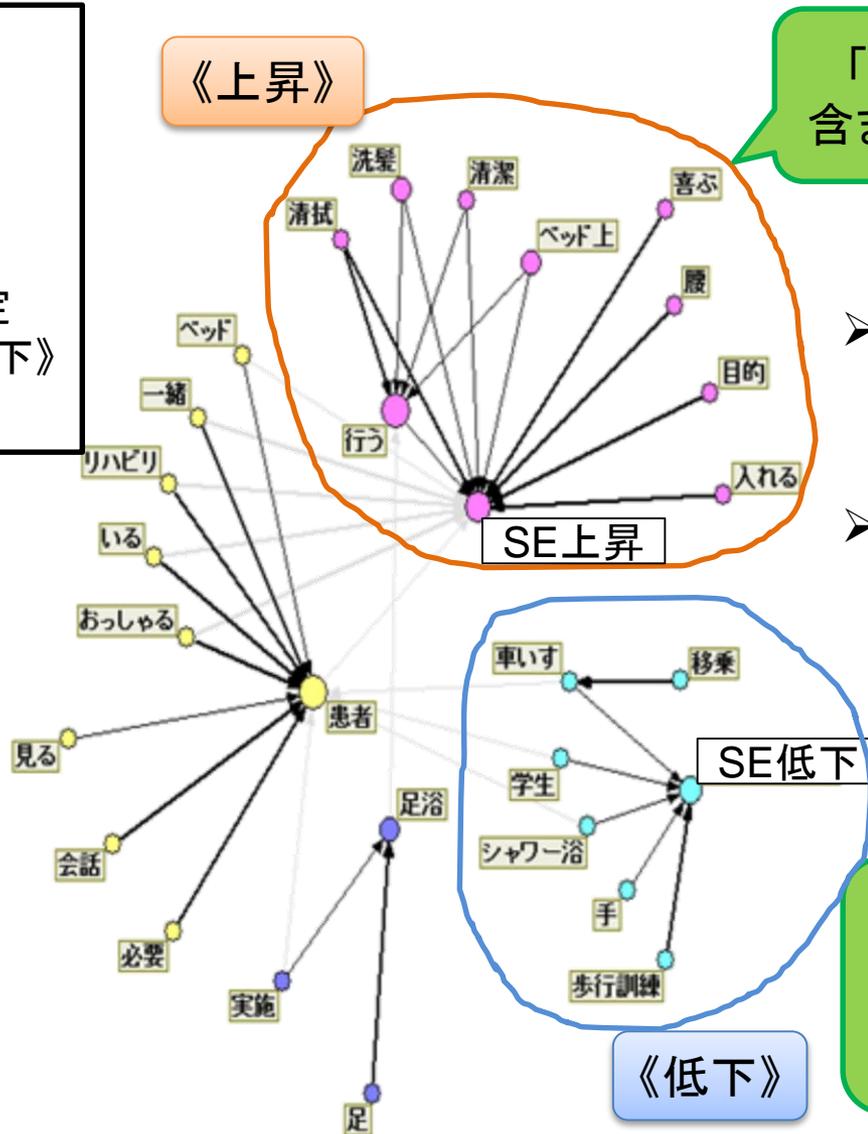
- 両群に共通した単語は「患者」「行う」だった。
- 《上昇》のみは「リハビリ」だった。原文では、『患者さんと一緒にリハビリを行った』『患者さんに新しいリハビリ方法を教え・・・』『リハビリが必要な患者さんの車いす移乗を工夫して・・・』などの記述があった。
- 《低下》のみは「学生」だった。原文では、『私(学生)の見守りで・・・』『笑顔で私(学生)に向かってきた』『私が(学生)が見つめて・・・』などの記述があった。



単語同士の繋がり、単語と《上昇》《低下》の繋がりを知るため、
ことばネットワークを行う

ことばネットワーク:【場面】

品詞: 名詞・動詞・
サ変接続名詞
文章単位での共起
最低信頼度: 60
出現回数: 3回以上
述語属性: なし、否定
属性: SE《上昇》《低下》
クラスタ数: 4



「喜ぶ」が
含まれている

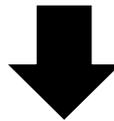
- 両群ともに「清拭」「洗髪」「シャワー浴」など清潔ケアがあった。
- 《上昇》のクラスタにのみ「喜ぶ」があり、患者からの「喜ぶ」反応だった。



《上昇》の学生は患者からの「喜ぶ」という反応も含めて、良いケアができた【場面】として捉えた

考察：【場面】

- 「ベッド」や「ベッド上」で清潔ケアを行う時には、患者の移乗や体位変換を伴う。実習前の演習では清潔ケアだけでなく、患者の車椅子移乗や体位変換といった技術も練習していたが、単語頻度解析ではなかった。
- ことばネットワークの《低下》のクラスタには「移乗」→「車いす」という単語の繋がりがあった。



- 「ベッド」や「ベッド上」で清潔ケアを実施した学生が【場面】に移乗や体位変換を記述しなかった理由は以下の2点と考えた。
 - ①実施する清潔ケアの手順に集中してしまい、**心理的余裕がなかった**ため。
 - ②清潔ケアを実施するための移乗や体位変換に、患者の安全や安楽を保障する**看護的視点を学生はまだ獲得していなかった**ため。

考察：【場面】

- ことばネットワークの《上昇》のクラスタにのみ「喜ぶ」があった。
- 《上昇》の学生は清潔ケアを実施した事実だけでなく、患者からの「喜ぶ」反応も含めて良いケアができた【場面】と捉えた。



- 《上昇》の学生は、初めての実習での不安や緊張を乗り越え、患者の「喜ぶ」反応により自らの存在意義を見出し、患者の役に立ったという満足感を得ることができた。しかし実施したケアの問題点を認識し、自ら学習目標を立て達成したという記述はなく、“できた感”から“できた”への変化がSE得点の上昇に影響していることは確認できなかった。



《上昇》の学生は、患者の「喜ぶ」反応をよいケアができた【理由】として挙げているのだろうか？それとも実施したケアを振り返り、問題点を認識し目標を立て達成したからと記述しているのだろうか？

SE得点の変化と【理由】

表6 単語頻度解析:【理由】

《上昇》		《低下》	
患者	22	患者	16
行う	10	ケア	6
ケア	9	学生	5
考える	7	会話	3
学生	6	考える	3
足浴	5	行う	3
ADL	4	思う	3
喜ぶ	4	場面	3
リハビリ	3		
印象的	3		
自立	3		
清拭	3		
表情	3		

品詞: 名詞、動詞
 述語属性: なし、否定
 頻度: 3回以上

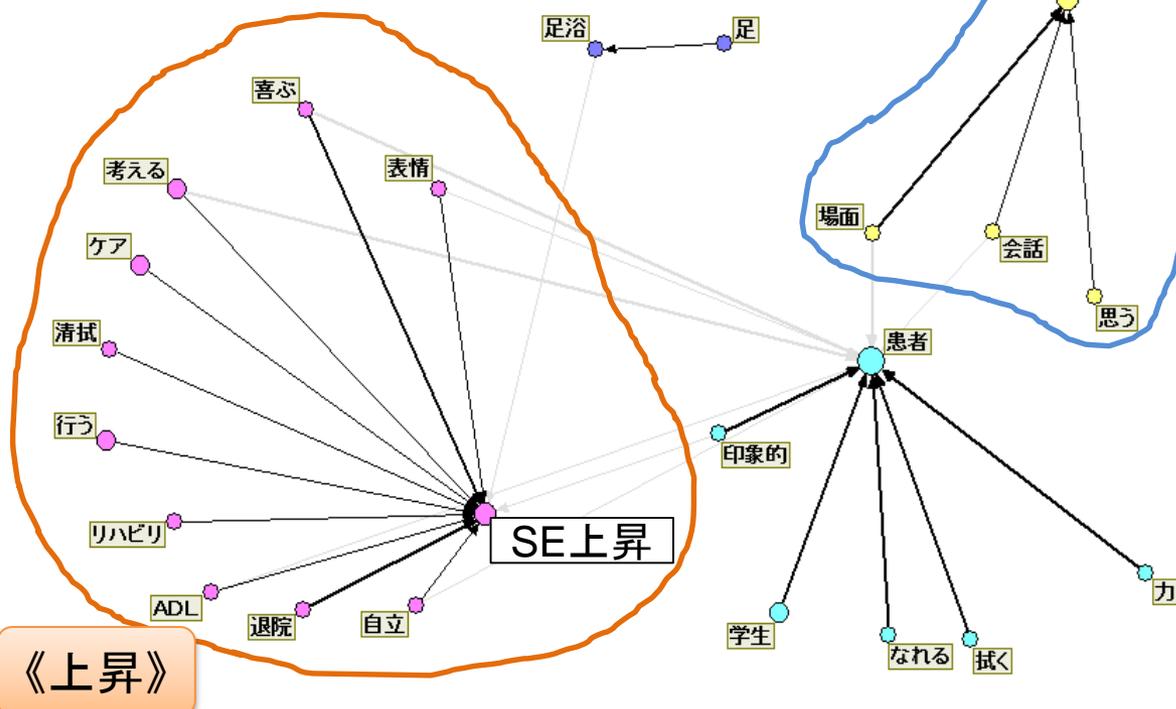
- 両群に共通した単語は「患者」「ケア」「考える」「学生」「行う」だった。
- 《上昇》のみは「喜ぶ」「ADL」「リハビリ」「自立」だった。
- 「喜ぶ」の原文では、『喜んでくださったのが印象的だったから』などの記述があった。
- 「ADL」「リハビリ」「自立」の原文では患者の自立を促す視点を理由として挙げていた。
- 《低下》のみは「会話」「場面」「考える」だった。原文では、『患者さんとの会話を通してニーズを考えられたから』などの記述があった。



単語同士の繋がり、単語と《上昇》《低下》との繋がりを知るため、ことばネットワークを行う

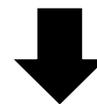
ことばネットワーク:【理由】

品詞:名詞-動詞・
サ変接続名詞
文章単位での共起
最低信頼度:60
出現回数が3回以上
述語属性:なし、否定
属性:SE《上昇》《低下》
クラス数:4



➤ 《上昇》は「リハビリ」「ADL」「自立」など、患者の自立を促す援助ができた、「喜ぶ」「表情」など患者からのポジティブな反応を理由に挙げた。

➤ 《低下》は「場面」や「会話」など、患者とのやり取りから患者のニーズを把握できたことを理由に挙げた。



【場面】同様、《上昇》の学生は患者からの「喜ぶ」反応を理由に良いケアができたと捉えた

考察：理由

- 多くの学生は良いケアができた理由に、患者の「喜ぶ」「気持ちよい」「表情」などポジティブな反応、「リハビリ」「ADL」「自立」など患者の自立を促す援助を挙げた。
- 《上昇》の学生は患者の自立を促す援助を行えたという理由、患者の「喜ぶ」反応があったという理由から、良いケアができたと捉えた。
- 《低下》の学生は、患者とのやりとりからニーズを把握できたからという理由で、良いケアができたと捉えた。



- 《上昇》の学生が【理由】に患者の自立を促す援助を挙げたのは、学生のケアに対する考え方が変化したためと考えた。実習当初の学生は、患者のために何かしたいという気持ちが強く、患者の身の周りの世話を全てやろうとする。しかし実習が進むにつれ、患者の自立という専門的な視点でケアを実施するか否かを考えるようになった。
- その背景には、自らのケアを見直し新たな学習目標を立てるという過程があると考えたが、同時に患者の「喜ぶ」反応もあった。



“できた感”から“できた”への変化が【気持ち】に現れているか確認する

SE得点の変化と【気持ち】

表7 単語頻度解析:【気持ち】

《上昇》		《低下》	
嬉しい	19	嬉しい	12
良い	2	良い	8
危なっかしい	1	気持ち良い	3
強い	1	軽い	1
素晴らしい	1	広い	1
早い	1	歯がゆい	1
多い	1	多い	1
良い+ない	1	大きい	1
鬱陶しい	1	長い	1
		難しい	1
		ない	1
		痒い	1

品詞: 形容詞のみ
述語属性: なし、否定
単語頻度: 1回以上

- 【気持ち】については感情を表現している言葉の種類を知るため、対象品詞を形容詞のみとし、名詞、動詞、程度を示す副詞は除外した。
- 両群共に「嬉しい」が最多だった。
- 「良い」は両群とも2位だったが、《上昇》に比べ《低下》が多かった。原文では『実施して良かった』『頑張って良かった』などの記述があった。



感情を表す言葉としては「嬉しい」が大半を占めており、「嬉しい」の注目語情報を行う

「嬉しい」の注目語情報

品詞: 名詞、動詞、形容詞
 文章単位での共起
 最低信頼度: 60
 出現回数: 1以上
 述語属性: なし、否定



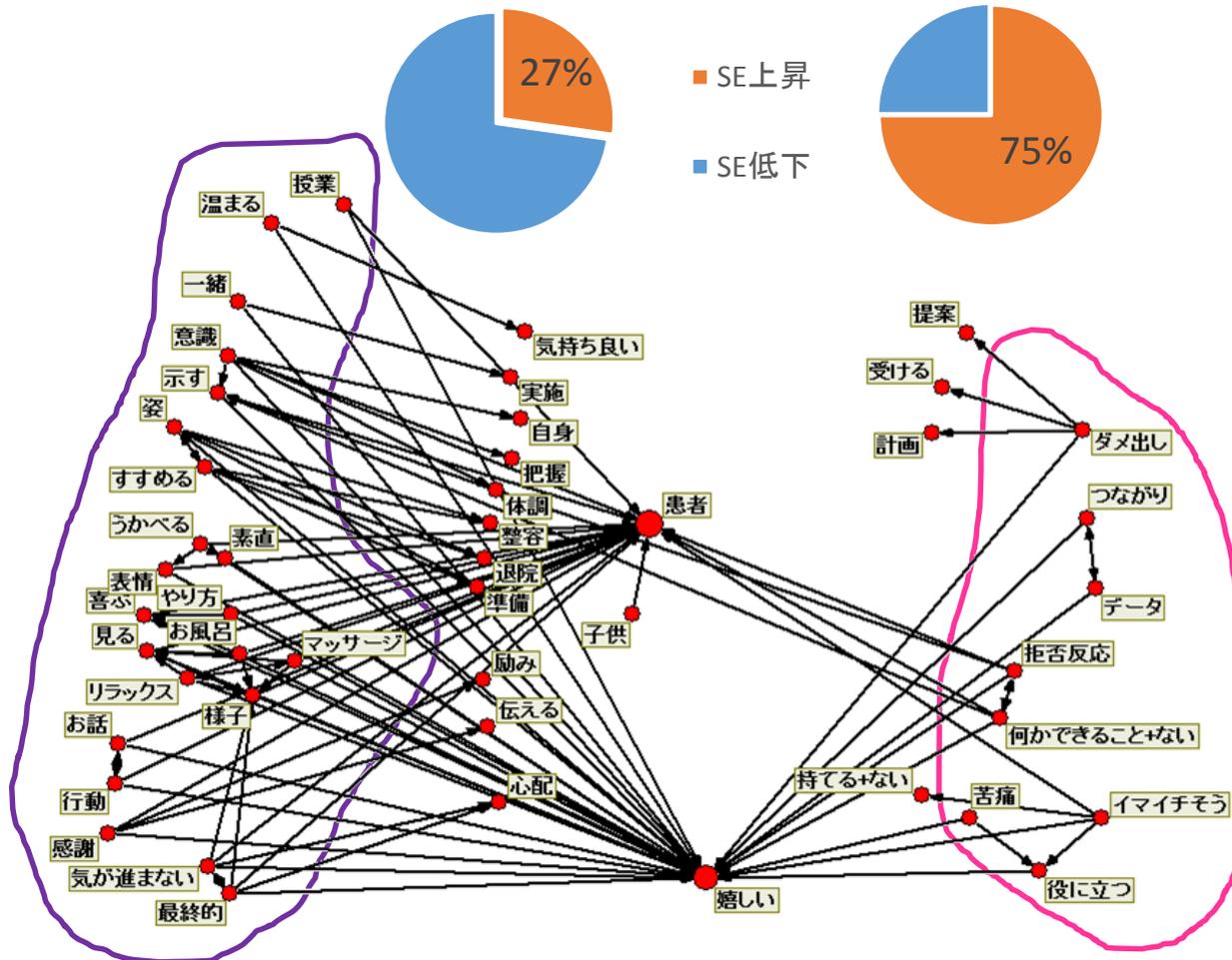
「嬉しい」とネットワークで繋がった単語の原文を読み、「嬉しい」と感じた理由を
 [患者からの反応]
 [学生の目標達成]
 に分類した



各群毎に学生のSE得点の変化を割合で示す

[患者からの反応]

[学生の目標達成]



「嬉しい」の注目語情報

- [患者からの反応]で嬉しい→27%の学生のSE得点が上昇した。
- [学生の目標達成]で嬉しい→75%の学生のSE得点が上昇した。
- [学生の目標達成]ではネガティブな単語が多かった。

「イマイチそう」「拒否反応」
「ダメ出し」「何かできること少ない」

- 原文では、学生は患者や指導看護師とのやりとりでネガティブな感情を抱いた。
 - 『全ての計画に対し、指導者さんからダメ出しを受けていたのに…』
 - 『患者さんは抑制することに対し、とても拒否反応を示していたので…』
 - 『患者さんからの反応もイマイチそうなものだったので…』
- その後、学生は自らのケアが達成できたことから「嬉しい」と感じた。

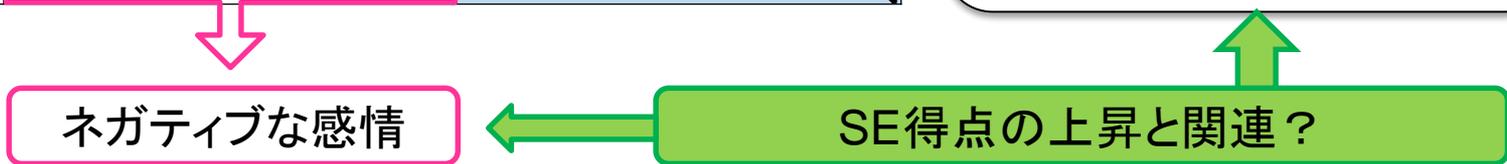
考察：【気持ち】

- 「嬉しい」という【気持ち】はSE得点の変化に影響を受けなかった。
 - 「嬉しい」の理由が〔学生の目標達成〕である場合は、〔患者からの反応〕と比較して、SEが上昇している割合が多かった。
- ↓
- 《上昇》の学生は良いケアができた【場面】【理由】に患者からの「喜ぶ」反応を挙げていた。しかし、〔学生の目標達成〕という理由で「嬉しい」とも感じており、【場面】【理由】【気持ち】にズレがあった。
 - また〔学生の目標達成〕という理由で「嬉しい」と感じた学生の多くは、「拒否反応」「何かできること+ない」「イマイチそう」「ダメ出し」といったネガティブな感情を感じていた。
 - これら2つがSE得点の上昇と関連があると考えた。

表8 自己効力感の変化と各記述の結果

	《上昇》	《低下》
【場面】	患者の「喜ぶ」反応	—
【理由】	患者の「喜ぶ」反応	—
【気持ち】	学生の目標達成	患者の「喜ぶ」反応

《上昇》と《低下》には【場面】【理由】【気持ち】にズレがある



考察：【気持ち】

なぜ《上昇》の学生は、患者の「喜ぶ」反応から「嬉しい」と感じた割合が少なかったのだろうか？



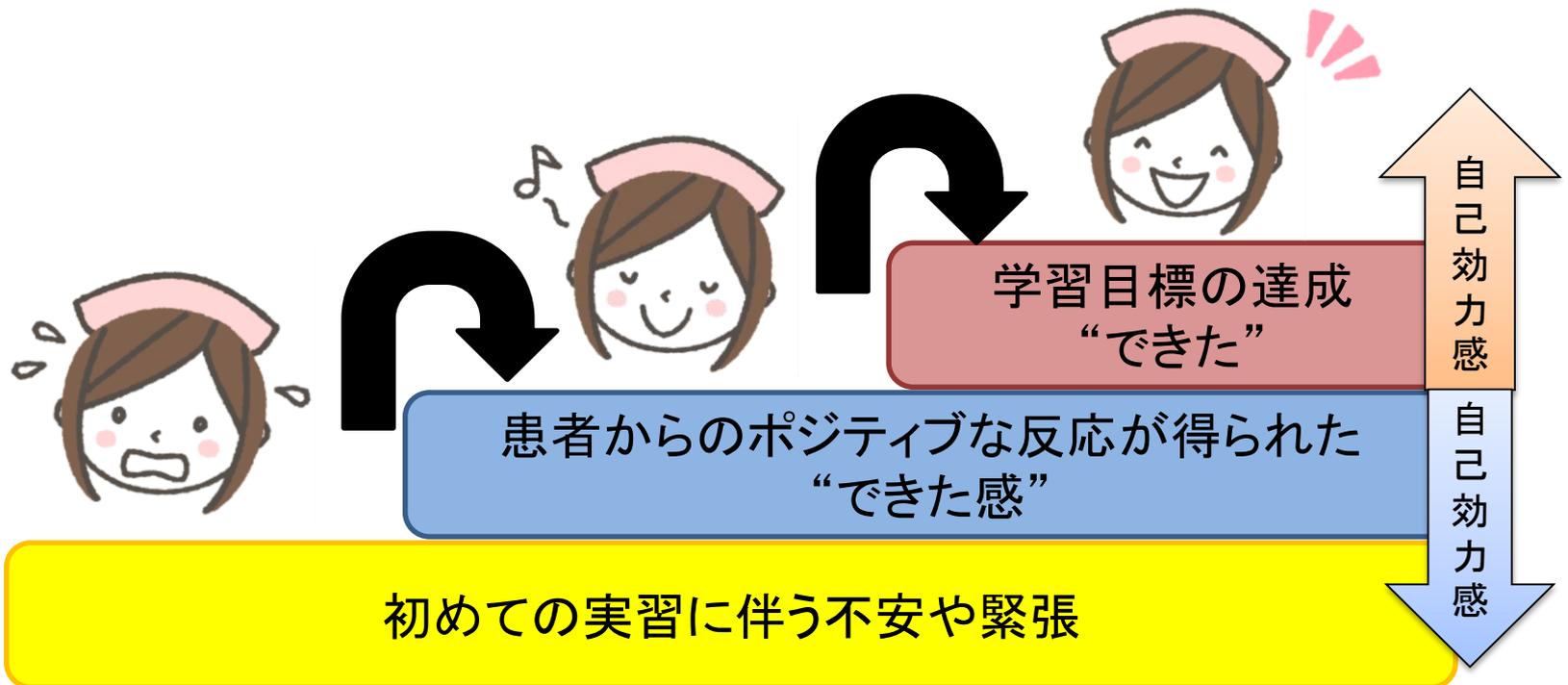
- 《上昇》の学生は、実習中に**自らのケアに対する達成感の基準が変化した。**《上昇》の学生は当初、患者の「喜ぶ」反応から患者の役に立てたと満足感を得て、良いケアができたと捉えた。しかし実習が進むにつれ、患者からの「喜ぶ」以外の反応や指導看護師・教員からの助言により、自らのケアに足りなかった点や改善点を見出した。
- その後、《上昇》の学生は、学習目標を再設定し、その目標を達成することで「嬉しい」と感じるようになった。つまり、良いケアができたという達成感の基準が、患者の反応から学生の目標達成に変化したため、患者のポジティブな反応で「嬉しい」と感じる学生が少なかった。



SE得点が上昇し、学生が再設定した目標を達成して「嬉しい」と感じることで、“できた感”から“できた”へ至ったのだと考えた

達成感の変化

- 学生は実習の当初、ケアを上手く実施できるかとの不安や緊張がある。そして不安や緊張を乗り越え、患者からのポジティブな反応を得られたという点で良いケアができたと判断する。しかし、それはSE得点の上昇に繋がらず、良いケアが“できた感”でしかない。
- その後自らの目標を再設定し、それを達成した時に、SE得点が増える真の達成感を得ることができる。



考察：【気持ち】

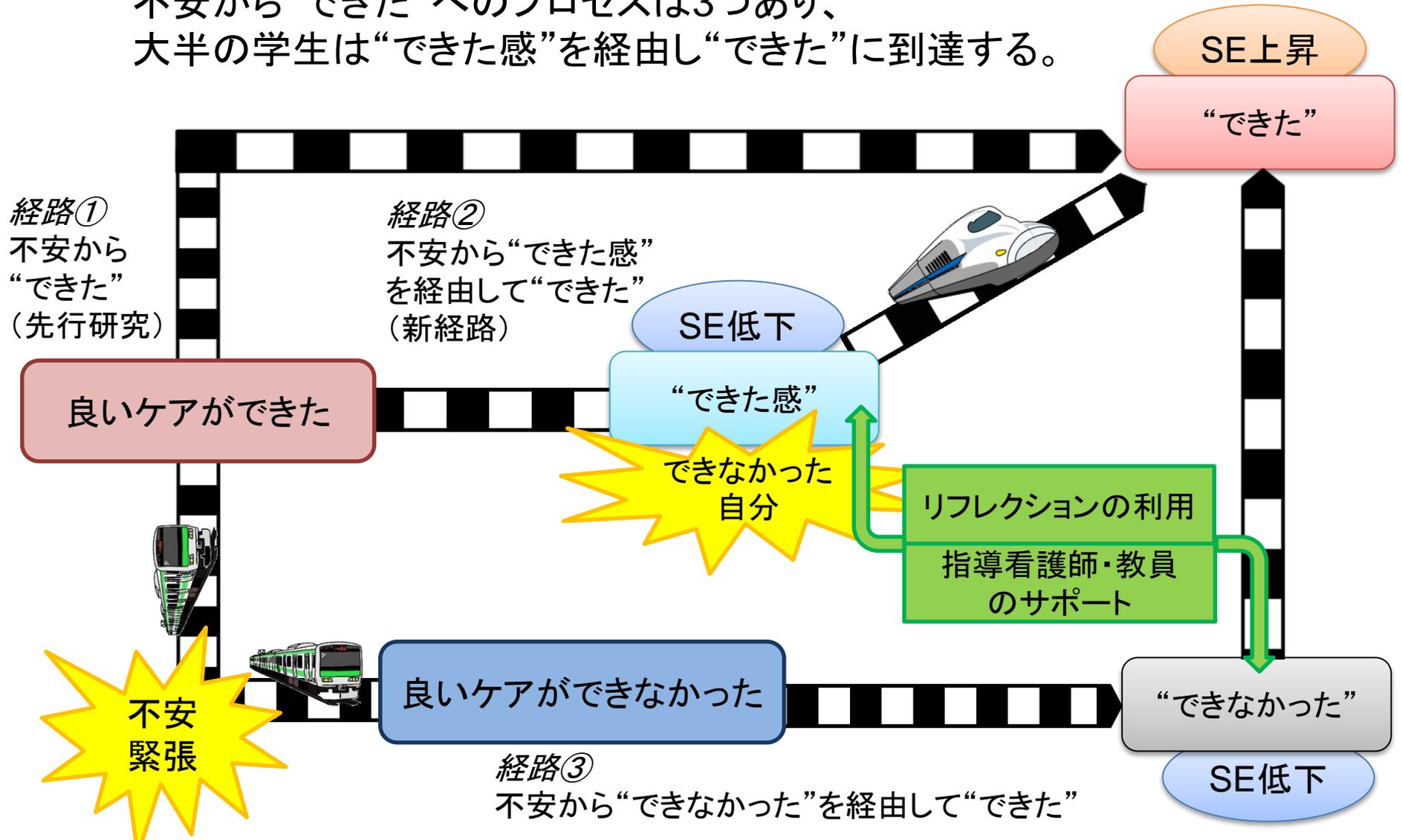
なぜ自ら再設定した目標を達成して「嬉しい」と感じた学生はネガティブな感情を抱いたのだろうか？



- 《上昇》の学生は、自ら実施したケアについて一度は患者の「喜ぶ」反応から良いケアができたと捉えた。しかしその後、患者からの「喜ぶ」以外の反応や指導看護師・教員からの助言、看護の専門的な視点により、自らのケアに足りなかった点や改善点を見出した。学生自身が振り返る際、ありのままの自分を認識し、できなかった自分と対峙することで、**学生自身の現状と目標との差を感じる**。そのため一時的にネガティブな感情を抱く。
- このネガティブな感情は、現状把握と目標設定の際に生じる感情であり、実習特有のストレスから発生しているものではない。そのため、このネガティブな感情が“できた感”から“できた”への関門となるのであれば、指導看護師・教員がサポートすることで、学生は“できた”の方向へ一歩を踏み出せる。

不安から“できた”へのプロセス

不安から“できた”へのプロセスは3つあり、
大半の学生は“できた感”を経由し“できた”に到達する。



研究の限界とこれからの展望

- 今回は「嬉しい」という単語に注目して注目語情報を行った後、「嬉しい」とネットワークで繋がっている単語を一つ一つ原文に戻り、「嬉しい」と感じた理由でカテゴリー分けを行った。この方法は、単に「嬉しい」と繋がっている単語を見てカテゴリーに分けるのではなく、原文に戻りデータと照らし合わせるテキストマイニングの強みを最大限に活かすことで、文章全体を吟味した上でカテゴリーに分けることができた。
- 良いケアができた時の学生の気持ちについて、対象者が少なく、感情を示す単語の種類も少なかった。次回は対象者を多くし、気持ちについても学生にありのままの感情を記述してもらうよう調査方法を工夫する。
- SE得点を実習前後の2点で比較したが、SE得点は実習期間中にも変化していると推測する。次回研究を行う時には、実習前、実習中、実習後の3点でSE得点の変化を比較したい。
- 今回の研究では“できなかった”から“できた”へ到達する学生について知ることができなかったため、次回の研究テーマとしたい。

結論

良いケアができたとしても、直接“できた”になることは少なく、多くの学生は“できた感”を経由し、リフレクション・教育的なサポートを受けて“できた”に至ることが明らかになった。

引用・参考文献

- 1) 遠藤恵子, 松永保子, 遠藤芳子, 佐藤幸子: 看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第1報) - 基礎看護技術演習による自己効力感の変化と影響する要因 -, 山形保健医療研究, 2, 7-13, 1999
- 2) Albert Bandura, 本明寛 訳: 激動社会の中の自己効力, 2008
- 3) 江本リナ: 自己効力感の概念分析, 日本看護科学会誌, 20(2), 39 - 45, 2000
- 4) 山崎幸恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子: 看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因, 信州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 25 - 34, 2001
- 5) Text Mining Studio チュートリアル バージョン5.0, 株式会社 数理システム, 2014
- 6) 服部兼敏: テキストマイニングで広がる看護の世界, ナカニシヤ出版, 2010